

\*\*\*\*\*

## STUDY ONE ～中学生の学習支援～

\*\*\*\*\*

### 第1章 プロジェクトの概要

#### 1. 「STUDY ONE～中学生の学習支援～」

伏見区を中心に、子どもたちが安心して学習できる空間をつくる活動を行う。

#### 2. 代表者及び構成員

・代表者

金原早希 社会領域専攻 2 回生

・構成員氏名等

今川裕也	教育学専攻	4 回生
立花麻衣子	教育学専攻	4 回生
森田開一	教育学専攻	4 回生
稲岡言美	国語領域専攻	4 回生
梨木悠	国語領域専攻	4 回生
芦田愛依	英語領域専攻	4 回生
白波瀬翔太	英語領域専攻	4 回生
田中海里	英語領域専攻	4 回生
西田光	家庭領域専攻	4 回生
上松夏林	教育学専攻	3 回生
森垣奈々	教育学専攻	3 回生
横田美莉	教育学専攻	3 回生
阪本葉菜	発達障害領域専攻	3 回生
村上結菜	発達障害領域専攻	3 回生
渡邊鈴佳	発達障害領域専攻	3 回生
下里愛子	理科領域専攻	3 回生
松井遼太郎	美術領域専攻	3 回生
下田馨介	社会領域専攻	2 回生
中川優佑奈	社会領域専攻	2 回生

宮島孟史	社会領域専攻	2 回生
安永和貴	社会領域専攻	2 回生
山下穰大	社会領域専攻	2 回生
福島嵯都	理科領域専攻	2 回生
鍋島圭	教育学専攻	1 回生
廣田葉月	教育学専攻	1 回生
松田健	教育学専攻	1 回生
天野小春	国語領域専攻	1 回生
岡田蔭しいな	国語領域専攻	1 回生
阪本萌菜美	国語領域専攻	1 回生
酒井彩花	社会領域専攻	1 回生
藪下瞬	数学領域専攻	1 回生
松本和樹	技術領域専攻	1 回生

#### 3. 助言教員

丸山啓史先生 発達障害学科

神代健彦先生 教育学科

### 第2章 内容や実践経過など

#### 1. 放課後学習教室 STUDY ONE

時間：毎週金曜日 18:00～20:00

場所：伏見いきいき市民活動センター

対象：中学生

STUDY ONE の主な活動は、この「放課後学習教室 STUDY ONE」という学習支援中心の放課後学習教室を開催することである。学習に適した環境作りと、中学生の居場所づくりを並行して行う。藤森中学校と連携をとり、中学生を包括的にサポートすることができた。また活動が休みの週や毎回の活動日、なかなか活動に来ることができない子などに対して、団体で借用しているスマートフォンを活用し STUDY ONE と中学生のつながりが保てるよう、来たくなるように連絡を取り合った。

今年には施設利用の関係で4月末からの開

催となり、新型コロナウイルスの情勢を鑑みながらも一年間活動することができた。現在の登録者は中学3年生が2名、2年生が6名の計8名である。毎回の活動では4人程度が活動に参加しており、学校の宿題や持参した問題集、団体に借用・購入した参考書・問題集に取り組んだ。大学生は英文に読み仮名を振って中学生が音読できるようにするなど、柔軟に分からないところを教えたり、苦手科目との向き合い方を一緒に考えたり、学習方法を提示したりする。

さらに昨年度と今年度の視察での学びから、居場所づくりを意識した。相対的貧困の経験格差の是正や、「困り」の解決の足掛かりとして、七夕やクリスマスなどのイベントを行った。

昨年度同様、新型コロナウイルス感染対策のガイドラインの作成や、参加者同士の距離が十分に取れるよう机を配置することで、安全に活動が行えるよう工夫した。

## 2. 他団体への視察

### (1) 「学びの森」

令和4年度11月25日(金)に伺わせていただき、不登校や集団生活に不安を抱える子ども、学校や先生への不信感が登校拒否に繋がった子どもたちへの支援の場所としてフリースクールがどのように機能しているのかを学ばせていただいた。実際の児童生徒の様子は時間の都合上見ることができなかったが、代表の北村さんから今の学校の問題点や子どもとの向き合い方について具体的なことを学ぶことができた。

### (2) 学習会「たけのこルーム」

「たけのこルーム」は長岡京市と京都府立大学 長谷川豊准教授が共同して行ってい

る学習支援事業である。対象は生活保護受給世帯・生活困窮世帯の小学校1年生から高校3年生である。STUDY ONEと支援の対象とする校種がかぶっており、なおかつ学習支援を行っておられることから教科の指導法などについて学ぶために今年度12月5日に視察に伺った。当日は活動風景の見学と長谷川先生への質疑応答、学生ボランティアの方との意見交流を行った。

### (3) 京町屋学習会「京の抛り所」

「京の抛り所」は京都市と京都市ユースサービス協会、龍谷大学の連携事業で、家庭での学習環境が整いにくい中学生、高校生への支援を行っている。活動が築160年超の京町屋で行われていることが特徴である。団体の運営方法や、学習支援と活動場所の関係について学ぶために今年度の12月1日に視察に伺った。当日は子どもへの支援活動と活動の反省会の見学、学生ボランティアの方との意見交換を行った。

## 3. 勉強会

今年は昨年度の反省を生かし、大学生が意見を言い合える場を設定することを目的として月1回程度の勉強会を開催した。毎週金曜日に開催する通常活動で出た疑問点・中学生と接するうえでの悩みをしっかりと時間を取って話し合うことや、視察についての心構え・事前指導・反省会、1回生と上回生との親睦会の開催などを行った。

## 第3章 結果や成果など

### 1. 放課後学習教室 STUDY ONE

今年度は新型の影響も昨年度よりは少なくなり、子どもたちと関わる機会というのが確保できたと考える。また、昨年度に引

き続き担当制を用いて、中学生と担当する大学生が信頼関係を築いていけるように努力した。活動の中で勉強をする意欲的な中学生、意欲的ではない中学生となど様々な中学生と関わる機会があったが、その中学生の求めていることに応じて勉強をしたり、会話をしたりするなどして、中学生ひとりひとりにあった関わり方ができたと思う。学習面では基礎が定着していなくてなかなか理解が出来ないこともあったが、復習を丁寧にしていくことで理解を図った。また、昨年から継続して活動に参加している中学生の中には昨年と比べて勉強をする時間が増えたり、自分の興味のある部分について大学生に質問したりと昨年と比べて意欲的に学習に取り組んでいた。また、3年生の生徒は高校進学へ向け、活動の中で過去問や問題集などを解くなどして理解を深めていった。活動に参加する中学生の数は多い日も少ない日もあったが、中学生が充実した時間を送れるように努力をした。そして、中学生が帰宅したあとの振り返りでは、中学生の様子や気づいたことまた中学生との関わりの中で感じた疑問について話し合った。振り返りが次回の活動にいかしていけるように毎回ノートを書き、一読することで中学生のことが分かるように工夫をした。

## 2. 他団体への視察

### (1) 学びの森

フリースクールとして活動されている「学びの森」は、京都府の認可を得ている点やボランティアではない点など私たちの団体とは異なる部分があったが、フリースクールとして困りを抱える子どもと接する中

で得られてきた経験や理論は私たちの活動におおいに生かせるものであった。特に、子どもたちが過ごす環境という面では私たちの意識改革に繋がったと感じる。「学びの森」では、部屋の中央に木が植えてあったり、季節ごとのイベントで子どもと一緒に作ったものを飾っていたり、机を円形に配置するなど学校というよりも図書館やカフェといった印象を強く受ける空間であった。このような空間構成には「学校のような無機質な空間からは柔軟な考えが生まれにくい」という理由があった。この考え方は私たちの活動にも活かせる部分であると思う。例えば、イベントで作ったものを飾っておく、入る部屋のドアノブにクイズを書いたボードを掛けることで、中学生が部屋へ入りやすくするとともに、会話の糸口にするなどの例が挙げられる。

もう一点私たちの意識が変化したという点で成果があったことは、子どもと話し合う大切さを改めて感じたということである。先に環境の話挙げたと思うが、これにおいても大学生側だけでなく、活動に参加する中学生と一緒に作り上げることに意味がある。それ以外にも、中学生自身がどの部屋で自分は勉強したいのか、活動のルールはどうするのかといったことについて一緒に話し合ったうえで決める重要性を感じた。

以上の点は、あくまで「学びの森」から得た学びであるため、今後私たちの団体に合った形に落とし込んでいきたいと考えている。

### (2) 学習会「たけのこルーム」

教科の指導法を中心にお話を伺うつもりだったが、団体の本旨は子どものニーズを満たすことであり、週1回という限られた活

動である点からも、現在は勉強することは選択肢の一つであるが中学生のニーズに合わせて安心できる「学校とはまた別の居場所」となることを意識して活動しておられることを知った。STUDY ONE ではたびたび学習支援、居場所支援そのどちらに主眼を置くべきかという議論が行われてきたが、他の視察先の京の拠り所でも勉強中心の支援から居場所中心の支援に方針の転換が行われているという事実と併せてこの議論に一石を投じる考え方の発見であった。また長谷川先生との質疑応答を通じて、活動時間が限られている場合は継続的な支援が有効であること再認識し「現在 STUDY ONE では中学校3年生を中心に募集をかけているが、この制限をなくし中学校1年生から募集の対象にすること」を団体への提案として行った。STUDY ONE の現状として活動に参加する中学生が少なく大学生のボランティアが余っているという問題の解決策となるよう、現在募集対象を上記のとおり変更している。

### (3) 京町屋学習会「京の拠り所」

京の拠り所では、団体の運営を大学生が中心となって行っている点・子どもに対して基本的に同じ大学生が対応するという担当制を取っている点、など共通点が多かった。そのため京の拠り所が活動を円滑に進めるために用いておられるシステムは STUDY ONE に導入するがことができると考え、特に有効だと視察班の中で意見の一致をみた2つについて視察成果報告会にて導入の提案を行った。「ミニホワイトボードの購入」と「活動記録の書き方のフォーマットの作成」の2点である。ミニホワイトボードについては既に購入済みであり図形問題の解説など

に活用しており、大学生からイラストを用いた説明がしやすくなったという声が聞かれている。活動記録のフォーマットについては1回生を中心に記入する項目の選定を行い、今年度は試験的に取り入れ、来年度から本格的な導入を予定している。

### 3. 勉強会

今年度は、第2章でも述べたように、月1回程度の勉強会を開催することを目標に取り組んできた。主な成果としては、視察先を選ぶためにKJ法を利用し、できるだけ活動に参加する全ての大学生の意見を参考にした点である。実りある視察・勉強会には目的が必要であるため、今自分たちが気になることは何で、何を知って自分の糧としたのか、そういった視察の目的をこのKJ法を利用することで見つけ出し、それを基に視察先を選ぶという手段を取った。そのおかげもあってか、これまで以上に実りある視察になったと感じている。2つ目の成果としては、しっかりと時間を取って視察の反省会を行ったことで学んだことを自団体に生かした点である。視察を行っただけでは意味がないため、学んだことをどのようにすれば生かせるのかを議論することが重要だと考えた。そのため反省会では、グループごとに視察先で学んだことをプレゼンするとともに、自団体への提案をしてもらった。これらの内容は既に第3章 2. 他団体への視察に記載した。

### 第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度は中学生に対して大学生の人数が圧倒的に多く、大学生余りの状況をいかに

有効活用するかが課題であった。その時間を担当の中学生以外とも広く関わることで居場所づくりのサポートをするだけでなく、学生同士で中学生が躓きやすい問題などの困りに関する研究の時間にあてた。来年度はより一層藤森中学校との連携を強化するとともに、中学生の募集の方法や対象をもう一度練りなおしたい。また、中学生一人一人にあった関わり方をするなかで STUDY ONE に来ようという意識が芽生えるなど中学生に良い変化が見られたこともあった。一方で、中学生一人一人を見れば学習面などで克服すべき課題がまだまだある。さらに来年度は通ってきている中学生の多くが受験生になる年である。中学生のニーズに合わせて居場所支援を行ないつつ、安心できる学習環境を提供し学習面でも支援する体制を整えたい。

また、他団体への視察を行ったことに関しては、学生の知見を深められただけでなく、活動を発展させていく手がかりを得られた。視察で得た学びを学生同士のプレゼンを通し共有することで自団体に還元できた。その過程で他団体と比較して自分達の団体の強みに気付けただけでなく、教材や振り返りシートの様式などを実際の活動に取り入れ、視察を実りあるものにできたのは良かった点である。来年度は今回新しく取り入れた内容に改良を施していき、多様な支援の仕方を模索したい。